

大分県におけるハラアコブカミキリの生態並びに防除の試み(II)

— 生 活 史 —

大分県林業振興課	萩原幸弘・黒木隆典
	河室雄二郎・桑野功
大分県竹田事務所	友成明夫・佐藤真一
	上村豊治
大分県林業試験場	堀田隆・高橋和博
日本きのこ研究所	吉富清志

ハラアコブカミキリ(*Moechotypa diphysis* PAS COE. 別名、ベニフカミキリ、以下、本種、という。)の生態については、小川ら^{1), 2)}藤本^{3), 4), 5), 6)}森本ら⁷⁾の報告がある。昭和52年8月、大分県下で定着が明らかにされた本種について、系統だてた調査は出来ないが、生活史の概要、とりわけ、越冬場所の確認など若干の知見を得たので報告する。

1. 発見から現在までの生態観察

筆者らが夫々断片的に行った現地観察と個体飼育の結果から、模式化して生活史を示すと図—1のとおりである。

2. 生活史についての検討

1. 越冬虫態及び越冬場所

本種は、一般的には、年1化で成虫態越冬型の発生経過をとるが、1部に、幼虫態越冬型のものがある。これは、産卵期間が長期にわたるためと考えられ、産卵後期の夏期に産卵されたものは幼虫で越冬するものと思われる。場所によっては、幼虫態越冬型のみ被害材もある。

越冬場所は、幼虫態越冬のものは被害中の樹皮下で、成虫態越冬のものは落葉層、腐植層下の浅い土中で行われることが確認された。羽化脱出後の成虫は後食を繰り返し飛翔分散して越冬するが、晩秋に羽化したものは脱出地の周囲で越冬する傾向がある。

2. 成虫態越冬個体の越冬あけ

日最高気温が17~18℃以上の日が2~3日続くと、日当りの良い場所では越冬からさめ、地表面にはい出した動きの鈍い個体がみられるようになり、越冬あけのピークは3月下旬から4月上旬頃である。

3. 抱卵状況及び産卵経過

抱卵状況調査例では、被害材の周囲で越冬した個体、15頭について調査したところ成熟卵を有するものは1個体であったが、4月11日に、新しいシイタケ原木に飛来した17頭についての調査では16頭で成熟卵(1頭あたり1~34粒)がみられた。羽化脱出後から越冬するまでの間に後食した量の違いにより、このように蔵

卵状況が異なるものと考えられる。

交尾、産卵については、4月11日に新原木上で行動が観察された。その後の経過については、定量的な調査が出来ていないので、雑な表示になっているが、昭和53年の場合4月下旬から5月にかけて産卵のピークがあった。この中で、日当りのよい原木伏込み地では早い時期に、日陰のところではやや遅れて成虫飛来が多くなるようである。産卵は産卵痕(幹に対し直角方向に4~10mmの噛み傷をつける)上下に各1粒づつ材の繊維方向に沿って産み付けられるものが普通であるが各2粒の例も観察されている。

4. 卵期間

4月中旬に産卵直後のものを7粒採卵して、室内飼育を試みたところ、4月30日から5月2日にかけて孵化した。卵期間は、主に温度の影響を受けることから考えると、春先では3週間程度、夏期では2週間以内と考えられる。

5. 幼虫食害経過

4月の早い時期に産卵されたものは、5月上旬には孵化し樹皮下の食害をはじめが、被害が目につくようになるのは、蛹室形成のため辺材部を食害し繊維状の木クズを外に出すようになってからである。なお、幼虫態越冬のものはその生育度合に応じ、越冬あけ後、食害するものと思われる。

6. 蛹期間

昭和52年9月4日に採取した個体の室内飼育例では9~9.5日(大分測候所9月上、中旬平均気温24.7℃)であった。蛹期間についても、卵期間同様のことが云えるので、孵化時期によりかなりの違いがある。

7. 羽化脱出期

昭和52年9月4日に採取した蛹、幼虫の室内飼育による羽化経過及び現地観察から羽化脱出経過を推察すると、8月下旬にはじまり9月をピークとした経過をとったものと考えられる。昭和53年は前年に比べ、やや早い傾向が認められた。

また、幼虫態越冬個体については、老熟幼虫の室内飼育で7月上旬から羽化したものがあったほか、現地観察で8月上旬に羽化脱出したものがあった。

8. その他

成虫はクヌギ等広葉樹の枯れた枝、幹部の外皮を好

んで後食するが、ヒノキの枯枝を後食したものも観察されている。羽化脱出直後の成虫は、日中は日陰側に静止し、夕方から夜半にかけて活発な後食、飛翔活動がみられたが、晩秋に入り気温の低下とともに成虫も見られなくなる。越冬あけの成虫は日中に盛んに飛翔し、新芽のふきはじめたクスギ林分でも容易に採取できるようになる。そして、クスギ等伐木へ誘引され、交尾、産卵を行う。

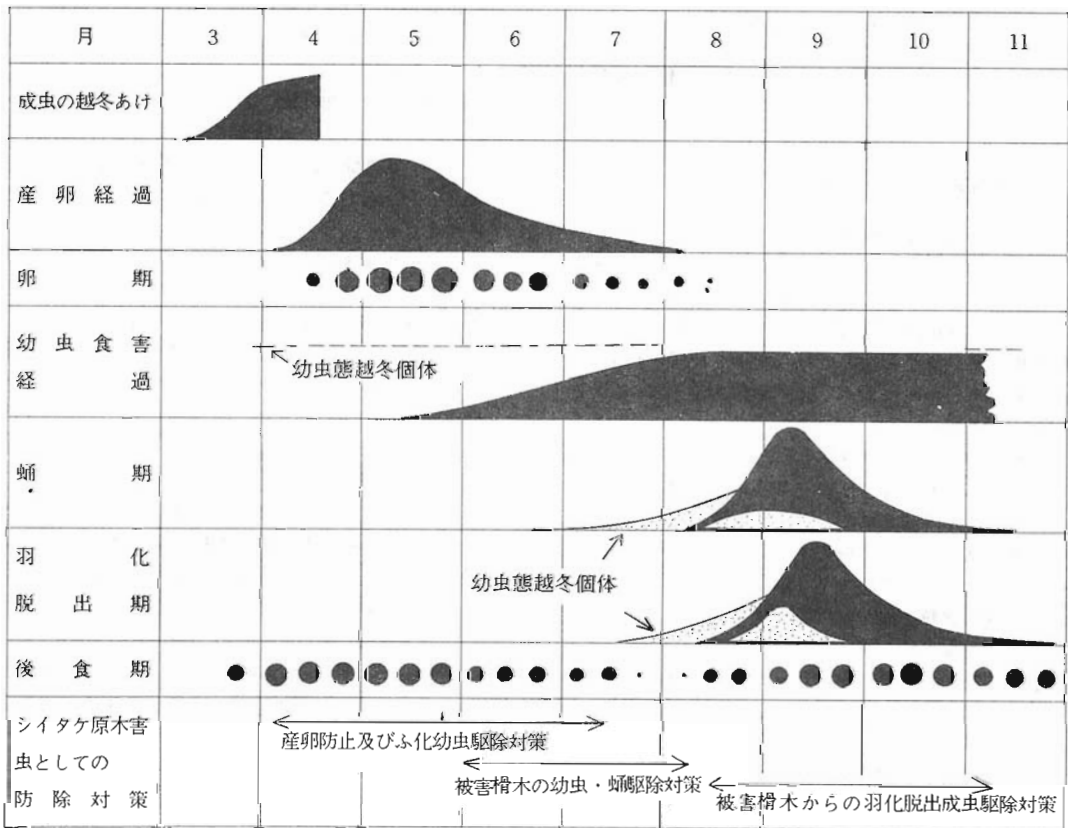
以上、昭和52年8月から昭和53年9月までの観察結果を継ぎ合せ、大ざっぱに生活史のべたが、大分県下での繁殖事例のほか、福岡県下のシイタケ栽培地でも侵入が確認され、発生地には、クスギ林分が豊富に分布しており、今後、本種の分布拡大が憂慮される。

なお、昭和53年度より、県林業試験場において、大型プロジェクト研究として“食用きのこ類の高度生産技術に関する研究、一ハラアカコブカミキリの生態、生活史及び侵入機序の解明並びに防除薬剤の検索”が

取り上げられており、その成果を期待したい。

参 考 文 献

1. 小川義雄; 対馬農業試験場, 昭和46年度試験成績 29-35, 1971
2. ———, 渡辺秋利: 対馬農業試験場, 昭和47年度試験成績 66-75, 1972
3. 藤本幸夫; 菌莖, 15(6), 10-13, 1969 ———
4. ———; 菌莖, 16(7), 7-9, 1970
5. ———; 日林九支研論, 30, 307-308, 1977
6. ———; 日林九支研論, 31, 303-304, 1978
7. 森本桂, 安藤正武, ———; 菌莖, 24(9)20-23, 1978
8. 萩原幸弘, 河室雄二郎, 桑野功, 友成明夫, 佐藤真一, 上村豊治; 森林防疫, 27(7), 5-10, 1978
9. 黒木隆典, 萩原幸弘; 林業と薬剤, 65, 11-16, 1978



注) 成虫越冬あけ及び幼虫食害経過は累積で图示。

図 - 1 ハラアカコブカミキリ生活史の模式図 (1977~1978年)